

運論証に対するロウの応答

山口尚 (Sho YAMAGUCHI)

京都大学

リバタリアニズム一般への代表的な反論のひとつに「運論証 (luck argument)」がある。この論証は——単純な見かけとほうらはらに——応答するのが難しい（この点は今回の発表でも指摘・強調したい）。それゆえ、いかなるタイプのリバタリアニズムの成否を検討する際にも、「運論証へ応答できているか否か」という基準は有効な試金石になる。本発表では、運論証への応答の仕方へ焦点を絞りつつ、ロウの新しいリバタリアニズムの利点および欠点を見極めたい。

運論証とは何か。それは、因果的な非決定性がコントロールの不在を含意するという前提から、非決定的かつ自由な決心や選択がありえないと結論する論証である。より詳細には以下である。まず、リバタリアニズムによれば、自由な決心や選択（あるいは、少なくともそのうちの重要なもの）は先行する因果的に十分な要因をもたない。この意味で、リバタリアニズムにおいては、自由な決心や選択は「非決定的」である。ここで運論証は、コントロールの不在を「運」という語で表わし、次のように進む。

- 前提1 もし決心や選択が非決定的であるならば、それは運の問題である。
- 前提2 もし決心や選択が運の問題であるならば、それは自由ではない。
- ∴結論 もし決心や選択が非決定的であるならば、それは自由ではない。

運論証は、ストレートに解釈すれば、リバタリアニズムの不可能性を主張している。言い換えればこの論証はリバタリアニズムが、実際には真でないことのみならず、真でありえないことを主張している。それゆえ運論証は、仮にそれが正しければ、かなり強い結論を齎すものだと言える。

はたして運論証は正しいのか。論証の実質的なステップは前提1だと解釈できる（前提2は「運」の意味からただちに真になると言そうである——断言はできないのだが）。前提1は一瞥するかぎり素朴であり容易に棄却できるように見える。とはいえ前提1は以下のような力強いサポートをもつ。

世界 $w1$ でアリスは真実を話すか嘘をつくかの選択を迫られている。彼女は、非決定的な仕方で、真実を話す方を選んだ。ここで、彼女の選択は非決定的であるので、次のような可能世界が存在する。それは (i) $w1$ と自然法則を共有し (ii) アリスの選択の直前までは $w1$ と正確にそっくりであるが (iii) アリスが嘘をつくことを選ぶような世界である——これを $w2$ と呼ぼう。アリスの選択に至る以前には $w1$ と $w2$ の間にいかなる差異もない。かくして、運論証の提唱者曰く、 $w1$ のアリスの選択と $w2$ のアリスの選択の違いを説明するものは何もない。したがって、曰く、 $w1$ のアリスの選択と

w2 のアリスの選択の差異は運の問題である*。

近年、多くの論者が運論証の妥当性を検討しており、少なからぬ成果が蓄積されている**。ロウ自身も、いろいろな場所で***、文字どおり「手を替え品を替え」この論証が提示する問題にとりくんでいる。発表者はロウの議論が少なくともあるタイプのリバタリアニズムを運論証から守ることに成功していると考え（これは発表者がリバタリアニズムの実際の正しさを認めていることを意味しない）。他方で、発表者はロウの見解が（いくつかの観点からの）少なからぬ問題をはらむとも考える。かくして本発表では次のふたつを目指したい。第一にロウがどのような仕方で運論証に対抗するのかを正確かつできるかぎり簡潔に再構成する。第二にロウの議論について、その独特な点を明確化すると同時に、それが直面しうる問題を指摘する。

ロウが運論証へ応答する際の本質的なステップは次である。それは、多くの論者が採用する《理由は行為や選択の原因である》という見方を退け、逆に《理由は原因でない》という発想を徹底すること、である。この場合——この点が重要だが——原因をもたないことは理由をもたないことを意味しない。かくしてロウは、原因をもたないという意味で「非決定的な」決心や選択も何らかの理由をもちうると主張し、非決定的な決心や選択が理由をもつという意味で「コントロール」されうると論じる（こうして前提 1 を棄却する）。

ロウの立場は——彼自身自覚的だが——原因の秩序とは区別された理由の秩序の存在を認めるものである。ロウが原因なき決心や選択へ理由といういわば「運に対する防波堤」を付与しうるのは、まさしく原因とは区別された理由の存在を認めることによってである。これが運論証へのリバタリアニズムの唯一の可能な応答かどうかはさらなる検討を要するが、少なくともひとつの有効な応答であることは確かである。さらにロウは、「理由は原因でない」とただ述べるだけでなく、それを支える理論を具体的に展開している——ロウの独自性のひとつはこの点にあると言える。

ただし発表者はロウの立場が深刻な問題をはらむと考える。はたして彼の立場は適切な意味での自然主義と両立するだろうか（この問題はロウ自身が自然主義にコミットしているために深刻である）。ロウ自身が《自分の立場は自然主義に反さない》と何度も述べているので、この点を俎上にあげるのは野暮かもしれないが、それでも発表者はこの問題を見做すことができない。彼の立場は通常自然主義者であれば許容しない「追加の要素」をいろいろと認めてしまっている（例えば上記の理由の秩序など）。こうした立場はいかなる意味で「自然主義」と言われうるのか——この点は本発表においてじっくりと検討したい。

* この議論の定式化は A. Mele, 2006. *Free Will and Luck*, Oxford: Oxford University Press による（ちなみにメレは運論証が間違いを含むと考えている）。

** ケイン、オコナー、クラーク、メレはそれぞれ運論証へ応答しており、またより最近では C. E. Franklin や S. Shabo が論証の妥当性をめぐって議論している。

*** 例えば、S. McCall and E. J. Lowe, 2005. “Indeterminist Free Will,” *Philosophy and Phenomenological Research*, 70: 681-689 や E. J. Lowe, 2008. *Personal Agency*, Oxford: Oxford University Press, Ch. 9 など。